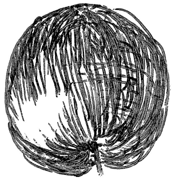
朝の林檎

おはよう、と私を起こしに来た夫は、手に林檎を持っていた。
林檎は赤く、丸い。
夫はカーテンを開け、寝室には光が満ちた。
夫の手の林檎は光を浴びててかてかしている。
「ねえ、それは？」
問いかけると、夫は無言で林檎をひと齧りした。しゃくっと小さな咀嚼音。こちらを見ながら笑顔の夫は、よくわからないけれど満足そうだ。よくわからないけれど。
ベッドから起き上がり、ガウンを羽織る。一緒にダイニングへ行くと、コーヒー、トースト、目玉焼きの朝食が準備されている。
「ありがとう、嬉しい」
そう云った私に夫はキスをして、君のことなら何でもわかるよ、と冷蔵庫からバターと苺ジャムを取り出す。私はバターを塗ったトーストに苺ジャムを乗せるのが好きだ。
ありがたいとは思ったけれど、同時に、やっとか、という脱力感。まあそんなところも可愛いよ、と口には出さない。
夫がテーブルに林檎を置き、私はすかさずそれを掴んで齧る。健やかな私たち。

昼の林檎



林檎を齧り終えた夫が、買い物にいこう、と云った。
近所のスーパーくらいかとラフな服に身を包んで車に乗り込む。ついた場所は街中の地下駐車場だった。夫は私を先導するように歩き、地上に出るとおしゃれな人たちが行き交っている。クリスマスまであと一ヶ月ほどで、誰も彼も幸せそうな顔。
「どこへ？」
好きなところでいいよ、と夫が云うので、書店とCDショップとデパートの食品売り場を提案する。にっこり笑った夫が歩き出して、私はそれについてゆく。
書店ではレシピ本を見て、難しくなさそうなものを一冊買った。
CDショップではテレビで気になっていたアーティストの新譜を見て、購入は見送り。
デパートの食品売り場では人混みを掻き分け、昼食用に少しお高いお弁当二つを手に入れた。
「あ、パン売り場も見たい」
菓子パンと総菜パンを豊富に取りそろえたパン屋。ただいま焼きあがりました、と声が上がり、並べられたアップルパイは美味しそうで値段も手ごろだったけれど、少し悩んで、見るだけにした。

夜の林檎

「ねぇ、林檎を取って」
私がそう云うと、夫は枕元の赤い果実を手渡してくれた。
左手に丸く収まる林檎はずっしりと重い。ベッドサイドランプの弱い光を細かく分散するのは表面に敷き詰められた小さな石が輝くため。宝石店で夫に買ってもらった林檎は、確かに、ここに、ある。
喜んでくれて嬉しい、と夫は私の髪を撫でる。本当は新しい指輪でも購入するつもりだったようだけれど、私は店頭でこの林檎を見て、目が離せなくなってしまった。
「新しい林檎」
呟くと、食べたくなってきたなあと夫はキッチンへ向かった。
私は手の中の林檎を握り、そっとくちづけをした。宝石の林檎は齧って体内に取り込むことができない。それは少し哀しくて、とても愛おしいことだった。
ベッドに戻ってきた夫の手にあるのは見事な大玉の林檎だ。包丁使いが怪しい夫は皮を剥かない。夫の実家から箱で送られてきたのでまだたくさんある。
楽園の実を与えてくれたのは夫だった。出会ったときから。
「明日、カップケーキ焼くね」
本で見た、新鮮な林檎を使ったレシピを試してみたいの、と伝える。抱きついて抱きしめてもらう。
ありがとうは二人の言葉。おやすみなさい。

11月25日が誕生日の人
吉本隆明
赤坂泰彦
坂口博信
塚地武雅
椎名林檎
氷砂糖

11月25日の記念日
女性に対する暴力廃絶のための国際デー
OLの日
ハイビジョンの日
氷砂糖結婚記念日

……まあそういうことだ

発行日：2017.11.25
発行者：氷砂糖